

12月に入り、今年もクリスマスシーズンがやってきた。クリスマスといえば、クリスマスツリー、サンタクロース、プレゼント、あるいは賑やかな音楽を思い浮かべる人もいると思う。また、クリスマスソングと並ぶ年末の音楽として、ベートーヴェンの交響曲第9番、いわゆる「第九」を知らない人はいないだろう。タイトルを知らなくても、第4楽章「歓喜の歌」のメロディはあまりにも有名だ。

なぜ「年末に第九」？

「年末に第九」のもともとのアイデアは、第一次世界大戦終戦後（1918（大正7）年）、平和を願う声が高まったドイツのライプツィヒで生まれた。名門オーケストラであるライプツィヒ・ゲ



2019年がメモリアルイヤーの作曲家

「メモリアルイヤー」とは、直訳すると「記念の年」。クラシック界では主に作曲家の「生誕100年」「没後150年」などが記念の年にあたる。メモリアルイヤーを迎えた作曲家は、その年のコンサートで演奏される機会が多いので、注目してみると面白い。

さて、2019年ほどの作曲家のメモリアルイヤーなのか。複数いる中で最も知名度があるのは、生誕200年のオッフェンバック、没後150年のベルリオーズではないだろうか。

1819年生まれ、ジャック・オッフェンバックは、フランス第2帝政下で

ヴァントハウス管弦楽団は、今日もその伝統を受け継ぎ、毎年大晦日に「第九」の演奏会を開いている。

他にも第九を年末に演奏する海外オーケストラは存在するが、年末の風物詩となっているのは、実は日本だけの珍しい現象である。

なぜ「年末に第九」が日本に定着したのか。これには諸説あり、複数の理由が重なったと考えられる。

- 1 東京音楽学校（現・東京芸術大学）により、1943（昭和18）年12月の学徒出陣の壮行会と、1947（昭和22）年12月30日に戦没者追悼のために第九が演奏され、以後、年末の第九演奏が伝統となった。さらに、東京音楽学校の流れを汲む日本交響楽団（現・NHK交響楽団）でも、1947（昭和22）年からほぼ毎年12月に第九を演奏するようになった。その後日本に新しいオーケストラが続々と誕生すると、昭和30年代には「年末に第九」が一般化した。
- 2 戦後すぐは、交響楽団といえど生活は苦しいものだった。年末の第九演奏は楽団員の年越し資金の確保という意味もあった。

主にこうした経緯で、「年末に第九」は日本に広まった。しかし何より重要なのは、「第九」には年代を問わず、人々を強く惹き付ける魅力があるということだ。そつでなければ、ここまで繰り返して

最も人気を博した歌劇作曲家である。代表作は、日本における運動会の定番曲「天国と地獄」だ。

1803年に誕生し、1869年に息を引き取って150年になるエクトル・ベルリオーズは、ロマン派前期フランスの最大の作曲家である。彼の代表作「幻想交響曲」は、唯一無二の音楽として現代に受け継がれている。

そんな偉大な音楽家である二人は、まったく異なる性質を持っていた。オッフェンバックはあっさりとした性格で、単純明快で陽気な音楽を作曲していたのに対し、ベルリオーズは激しい愛憎と夢想の持ち主で、内的世界の激情を表現するロマン派の代表作曲家だった。

対極の性格だった彼らは、それぞれ何を思い、同年代のフランスを生きたのか。そのヒントになる資料を紹介する。

- ・オッフェンバック 音楽における笑い（タヴッド・リッサン／著、高橋 英郎・東 多鶴恵／訳、音楽之友社、2000年、所蔵：中央）
- ※現在書店では販売していません



オッフェンバックの音楽は、笑いに満ちている。それは面白さからくる笑いで

演奏されることはなかっただろう。第九の絶大な人気の秘密とは、一体何であろうか。以下に、第九や作曲家であるベートーヴェンを知るための資料をいくつか紹介する。

- ・「第九」と日本人（鈴木 淑弘／著、春秋社、1989年、所蔵：東中野）



本資料では、日本における第九の初演から、最もポピュラーなクラシック音楽になるまでの壮大なドラマが語られる。指揮者や出演者の発言や資料の引用が多く、当時の様子が詳しくわかる。特に戦中、戦後の記述からは、人々の並々ならぬ思いを感じることができる。

- ・第九 ベートーヴェン最大の交響曲の神話（中川 右介／著、幻冬舎、2011年、所蔵：本町）

「第九」は日本だけでなく、世界中で愛される大曲だ。しかし発表当初は、楽曲としていま一つ人気がなかった。ベートーヴェンが死去してから、様々な音楽家が第九の魅力に気づき、自らオーケストラを指揮するようになって、その価値が世に知れ渡っていった。世界中に伝播し変容していく第九の神話性を追う。

はなく、喜びにあふれた笑いである。なぜ彼の音楽は優しい魅力にあふれているのか？ オッフェンバックの人となりや生涯、作品分析から、その秘密を探る。

- ・ベルリオーズ 作曲家別名曲解説ライブラリー19（音楽之友社／編、音楽之友社、1994年、所蔵：中央・鷺宮・上高田）

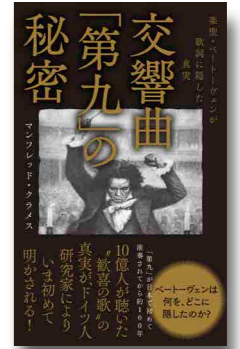
ベルリオーズの生涯と芸術性がコンパクトにまとめられ、作曲家を知る入門書としてオススメ。交響曲、管弦楽曲、歌劇、声楽曲それぞれの代表曲を解説しているのので、ぜひ音源を聞きながら彼の音楽を存分に味わってほしい。

- ・音楽のグロテスク（エクトル・ベルリオーズ／著、森 佳子／訳、青弓社、2007年、所蔵：中央）



ベルリオーズ自身が1859年に出版した小話集の初の日本語訳。ベルリオーズは作曲家だけでなく、多作な著作家としての顔も持たせていた。自身の体験談をもとにブラックユーモアのセンスたっぷりに書かれた本作は、当時の音楽事情も併せて読める。1冊で2度おいしい音楽評論集である。

・交響曲「第九」の秘密（マンフレッド・クラメス／著、ワニブックス、2017年、所蔵：東中野）



「第九」第4楽章はほとんどの場合、原典通りドイツ語で歌われる。その歌詞は、キリスト教における神や喜びについて描かれていると思われがちだが、実はギリシア的な世界観を持ち合わせている。一部ではあるが、歌詞の単語を一つ一つ分析した著者の考察を楽しめる。

- 中野区所蔵
- ★「第九」CD
 - ピックアップ★
 - 『交響曲第9番「合唱」「他」』ブリュッヘン／指揮、日本フォノグラム、1996年 所蔵：中央
 - 『ベートーヴェン・交響曲全集』カラン／指揮、EMIミュージックジャパン、2008年 所蔵：野方・南台

第九を聴き納めたら、今年もあとわずか。新年も引き続きクラシック音楽を楽しみたいと思った方は、メモリアルイヤーの作曲家に目を向けてみてはいかがでしょうか。

- 中野区所蔵
- ★「オッフェンバック」CDピックアップ★
 - 『序曲名曲集』バインズタイン／指揮、SonyRecords 1991年 所蔵：中央・野方・江古田
 - 『パレ音楽「ハリの喜心」』ロザンタール／指揮、東芝EMI、1999年 所蔵：中央
 - ★「ベルリオーズ」CDピックアップ★
 - 『幻想交響曲「他」』小澤征爾／指揮、ポリドール、1996年 所蔵：東中野
 - 『ローマの謝肉祭「序曲集」』デュトワ／指揮、LONDON、1997年 所蔵：中央・南台

ちなみに2018年はロッシニーが没後150年を迎えた。そこで中央図書館の視聴覚コーナーでは、ロッシニーをテーマとした展示を12月1日（土）から来年1月24日（木）まで開催する。当記事で紹介した作曲家のCDも豊富に取り揃えているので、この機会に図書館の視聴覚コーナーをぜひ利用してみてください。

- 参考文献・WEBサイト
- 『クラシック作曲家辞典』渡辺和彦／監修、学習研究社、2007年 所蔵：中央（禁帯）
 - チケットぴあ
 - 『第九』にまつわるエトセトラ』<http://p1ajp/feature/classic/daiiku/column.jsp>